

第40回 国際日本文学研究集会会議録

PROCEEDINGS OF THE 40th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE

Tokyo, 19th ~20th Nov. 2016

人間文化研究機構
国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE
NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES

日本語教材となった近代日本文学

— 講談速記を中心に —

アルベケル アンドラーシ ジグモンド
ALBEKER András Zsigmond (京都大学非常勤講師)

西洋の速記術は、日本ですでに幕末・明治初期に知られており速記術に接した人もいたようである。また、英和・仏和辞典や西洋文化を解説する書物に速記の説明・紹介も見受けられる。明治時代に入ると、速記の翻案も試みられ、やがて1882年に田鎖綱紀が「日本傍聴記録法」を『時事新報』で発表するに至った。その後速記記号の改良とともに速記の実用化が始まり、演説・講演・会議録・裁判記録の他に落語と講談の記録も行われていた。講談速記の初めは三遊亭円朝演述の『怪談牡丹燈籠』（1884年）である。この速記本は高評を得ており、講談落語速記ブームを巻き起こしたのである。

西洋の日本語研究者が日本語文典・テキスト集などを執筆・編纂する際に、昔話・演説速記・小説の抜粋もしくは全文をローマ字に転写して日本語のサンプルとして掲載した。また、口語の良い実例として講談落語速記、特に三遊亭円朝の作品にも注目した。選んだ理由としては、地の文まで口語体で書かれている小説の中で円朝の作品が最も優れているという点が挙げられている。1884年から明治末まで出版された話し言葉の教材の中では『怪談牡丹燈籠』『塩原多助一代記』の抜粋が英国の Aston、Chamberlain、Weintz、ドイツの Lange の教材に掲載されており、『蝦夷錦古郷の家土産』『明治の地獄』の全文がドイツの Lange と Plaut によって採用されている。しかし、原文とローマ字表記文を比較すると、誤植・不注意による異同の他に意図的に改変された部分も少なくない。日本語の練習が第一目的であるため、学習者にとって文章を分かり易くする必要があったと思われる。より口語的にするために古めかしい言い方や一部の指定表現も変えられたが、後者の変更によってその話し手の個性が失われ

たと考えられる。

上記のように円朝の作品が掲載されたとはいっても、様々な改変が行われた。しかし意識が付け加えられたこともあったため外国語への翻訳の試みと海外における近代日本文学の紹介としても評価できると考えられる。

第40回国際日本文学研究集會會議録

2017年3月24日発行

編集兼発行者

人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

電話 050-5533-2900

FAX 042-526-8604

URL <http://www.nijl.ac.jp/>

印刷所

株式会社 遊文舎

大阪市淀川区木川東4丁目17-31

電話 06-6304-9325